

熊本市職員向け研修プログラム
Diversity on the Arts Project
プログラム実践演習記録集

想い出
ファッショントリビュート
— 1個としての公務員 —

「熊本市職員向け研修プログラム DOOR」について

Q. 「熊本市職員向け研修プログラム DOOR」ってなに？
熊本市は、令和5年（2023年）に、東京藝術大学長で熊本市現代美術館長の日比野克彦さんに「文化顧問」に就任いただきました。日比野さんが東京藝術大学でディレクションしている「DOORプロジェクト」を熊本市役所の職員用にアレンジしたものが「熊本市職員向け研修プログラム DOOR」です。市職員全員が「アート思考」をもつことができるように、この研修を通じて人材育成を行っています。



Q. 「アート思考」ってなに？

文化芸術によって育まれる創造性や包摂性をもった、幅広い視野・柔軟な発想のことを「アート思考」と呼んでいます。

少子・高齢化と人口減少の進行、地域のグローバル化、価値観の多様化や地域課題の複雑化、社会経済環境の目まぐるしい変化など、社会情勢は大きく変化しており、これらに対応するためには、これまで通りの知識や視点、論理的な思考にとらわれすぎず、新たな発想で柔軟に対応していくことが求められます。



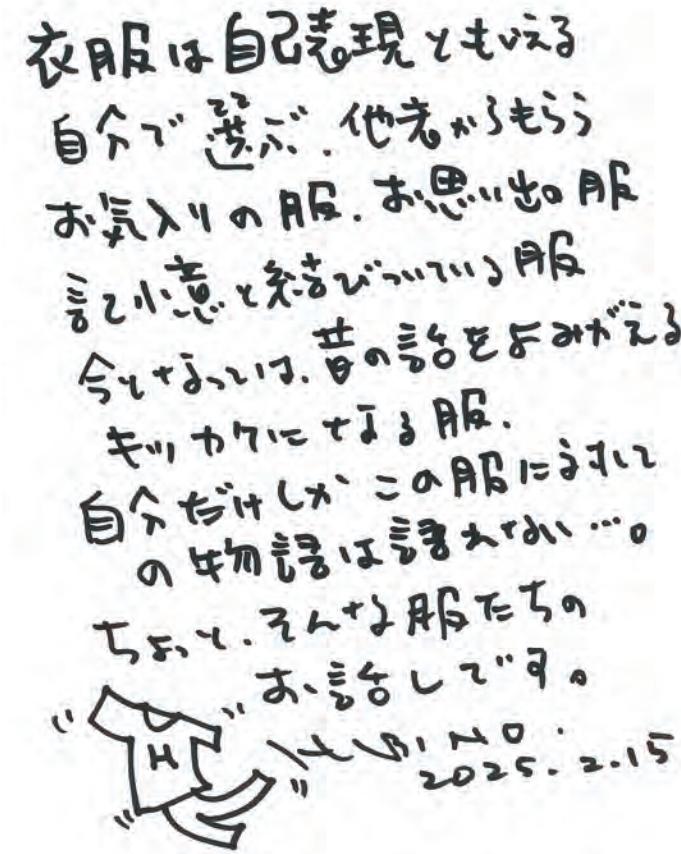
そこで熊本市では、アート思考を用いて地域課題の解決に向けて行動したり、暮らしと文化芸術を結びつけたりすることのできる市職員を育成し、多様なニーズへの対応や社会課題の解決を図ることに挑戦しています。また、市民にアート思考が伝わっていくことで、自ら地域課題解決のプロセスに関わり、持続可能なまちづくりにつながっていくことを期待しています。

Q. なにをしてるの？

「熊本市職員向け研修プログラム DOOR」では、1年間を通じて10回の動画研修、4回のワークショップ、1回のオリジナル講義を実施しています。

動画研修では、ダイバーシティ（多様性）がテーマの講義と、ケアや医療、福祉について考える講義があり、現代社会に生きづらさを感じている当事者や、表現者、専門家のお話を聴き、自らの思考を深めています。またワークショップでは、熊本市現代美術館と連携し、熊本市の地域性や独自の取組をいかしたオリジナルのプログラム実践演習を行っています。これらにより、知識やスキルの習得だけでなく、文化芸術からもたらされる多様性や包摂性を身に付けます。また、心が動いて視野や思考が広がる感覚を実感するとともに、それを周囲の人にも伝播していきます。

オリジナル講義は、前年度の受講生（修了生）が当年度の受講生に対し、自分たちが課題に思ったことや伝えたいこと等を講師になって教える、というものです。修了生が1年間学んだことを発揮する場となると同時に、受講生にとっても、同じ立場の行政職員が企画した内容ということで共感できる点も多く、たくさんの学びが得られると考えています。第1期生は「アート思考とは何か、研修で学んだことは何か、について言語化して同僚に伝えるのが難しい」という課題を持ち、「アート思考を言語化する」をテーマに講義を企画・運営しました。



「想い出ファッション展」について



熊本市現代美術館の企画展「LOVE ファッション — 私を着がえるとき」展とタイアップしたワークショップを実施し、その成果発表展として開催しました。

ワークショップでは参加者の想い出の服を持参し、その服への想いを他者と共に共有した上で展示しました。

自分が着ていた服への記憶を呼び起こし語ることは、服への愛着は元より自身の当時の想い出にさらなる彩りを与え、個々のかけがえのない想いの価値を再認識することができました。他者の想いを知ることも自分自身の大切な時間と思い起こすきっかけになりました。

出品者：東区役所保健こども課・事務職／教育センター・事務職／水道局計画調整課・事務職／食料保健課・薬剤師／水道局水道整備課・電気職／固定資産税課・事務職／都市デザイン課・土木職／花園まちづくりセンター・事務職／西消防署指導課・消防職／農業政策課・事務職／秋津まちづくりセンター・事務職／東区役所保護課・事務職／中央区土木センター維持課・土木職／生涯学習課・事務職／中央区役所保護第二課・事務職／高齢福祉課・事務職／健康危機管理課・保健師／農業支援課・獣医師／こども支援課・事務職／国保年金課・事務職

T.Mさん



高校の家庭科の授業で約1年かけて自分で縫った浴衣です。

呉服屋さんで自分で生地を選んで購入したのですが、大人の女性の浴衣といえば濃紺が主流だった当時、薄い紫の地色に蝶とその影を配した柄がひと目で気に入り、この生地に決めました。

もちろん和裁は初めてで、1枚のロール状の長い布を裁ってできた様々な長さや幅の長方形のパーツを縫い合わせていくと、それぞれがやがて袖や身ごろ、襟となり、みるみる着物ができあがっていく工程をとてもおもしろく感じました。

また、仕上がりを美しくするために縫い目が表に出ないようにする「きせ」や、長い距離(?)を縫うのに生地を引っ張って縫いやすくするくけ台など、和裁特有の技法や道具に日本人の細やかな心づかいを感じ、感動しました。

完成して四半世紀はゆうに経ち、色や柄からもさすがにもう着る機会はないと思うのですが、被服室のへラの痕がたくさんついた年季の入った木の作業台の柔らかな質感や、黄色と赤、どちらの色の帯の方が合うか母と言ひ合ったこと、今のようにネットや動画のない時代、友人たちと本を見ながらわいわいと着付けをしたことなど、社会に出る前の、今振り返ると束の間の小さな世界でしたが、眩しさ、懐かしさが感じられるこの一枚を今も手元に置いています。

ルイスレザーのライダースジャケットです。

1950年代の若いバイク乗りや、1970年代後半～のパンクロッカー達がこぞって着用していた歴史あるイギリスのブランドです。(最近はお金持ち有名人がオーダーし、SNSにアップしているイメージですが…)

- ・ラジオから流れる海外の音楽に衝撃を受け、洋楽を聞き出した中学生
- ・クラスにあまり馴染めず洋楽ロックに傾倒し、少ないお小遣いを貯めて音楽雑誌やCDを買い漁っていた高校生
- ・軽音楽部に入部し、下手なりに一生懸命エレキギターを弾いていた大学生
- ・車を買う予定で貯めたお金をすべて大型バイクにつぎ込んだ社会人2年目 等々

このジャケットを見ていると、点の思い出が線として繋がっていくような感覚があります。そして、自分の過去を振り返るといつの時期も憧れの対象(ロックミュージシャンやバイク乗り)はルイスレザーをカッコよく着こなしていました。

見た目ほど暖かくない。全体がスリムで動きにくい。そして自分にあまり似合っていないこともあります。でも、ずっと憧れていたとも大好きなライダースジャケット。

今年度の春に転職で公務員となり、仕事を早く覚えたい。一方でパンクの思想=反骨精神を忘れず、抗いながら頑張っていきたい。そんな今の気持ちにピッタリと考えてこの服をセレクトしました。

T.Kさん



Y.Rさん



これは、約4年前に購入したものです。当時好きだったアーティストである「YOASOBI」のデザインになります。今回のコンセプトである「エピソードが詰まったもの」が何か考えてみたときに、パッと目に付いたのがこのバッグでした。

購入した当時のことを考えてみると、「デザインがかわいかっただから」とただそれだけの理由で購入したと思います。しかし、このバッグとは購入した4年前から今までいろんなところと一緒に出掛けたことを思い出しました。大学の授業やアルバイト、旅行、また、公務員試験の勉強をするときもバッグに教材をいれて図書館に行っていました。

社会人になり、トートバッグを使う機会が減ってきたころに、家の片付けをしていたら、「汚くなってきたし、処分しようか」と思った時が一度ありました。しかし、これまでの思い出が詰まっているバッグを捨てることはできませんでした。その時に初めて、このバッグに愛着を持っていますことに気づきました。

これからも、このトートバッグを見て、たまに当時のことを思い出しながら、大切に扱っていきたいと思います。



M.Nさん



このパジャマは、1年前の12月24日、当時同棲していた彼氏からもらったクリスマスプレゼントです。普段は学生時代のジャージやスエットを着て寝ており、久しぶりのきちんとしたパジャマで、しかも名前まで刺繡してあるということで、とても嬉しかったことを覚えています。でも、口には出さない思いもありました。

わたしは以前から30歳で結婚したいと彼に伝えていました。そのため、今年は絶対にプロポーズをしてくれるだろうと勝手に期待していました。そのため、てっきり今年のプレゼントは素敵な指輪だと思っていたのです。

「今年は絶対パジャマじゃないだろ…。」と悲しさと小さな怒りのような気持ちがありました。

しかし、少し間が空いた後、彼は突然片膝をつき、小さい箱をパカン、と私がずっと憧れていたシチュエーションを実現してくれました。そして、何やら長々と熱い思いを伝えてくれていましたが、緊張して引きつっている彼の顔ばかりが気になり、言葉が何も頭に入っこず、また、涙もでず、自分はこれまでどちらかといえば感情的なタイプと思っていましたが、意外にも冷静でいられましたことに驚いたりしました。

きちんとした生地のパジャマはとても温かく、また、一人で指輪を買いつれて、今日もずっとドキドキしながら過ごしていたのかな、と思うと心もじんわりとぬくなり、これまでに感じたことのない満たされた気持ちで深い眠りにつくことができました。

H.Mさん



ファッションは私にとって「自分を彩るもの」と「鎧」のふたつの意味を持ちます。

その「鎧」の側面を色濃く写していたのがこのピアスたちです。

一時期は右耳に2つ、左耳に3つ、計5つのピアスホールが開いており、自分の見せかけの強さを表現していたように思います。着けるという動作は私にとって自分を奮い立たせるもので、さながら出陣式の『三献の儀』でした。

昔のパートナーに反対されていたピアス。ホールを増やして、言語化できない気持ちを抗議する。苦しくて辛い日々の中で、唯一私を私らしく表現できるのがピアスでした。きらきらと光る石やビカビカと光るゴールド素材がいつも私を勇気づけてくれました。ひとつひとつのピアスにこそ特別な思い入れはありませんが、これらすべてが私の鎧の代表格であり、武器であり、自己表現そのものです。

パートナーと別れ、ひとりの生活になり、鎧をまとう必要が無くなった今、ピアスホールはすべて塞いでしまいました。いまは好きな服を買って好きなときに好きなものを着られるので、ピアスで自己表現をする必要がなくなったからです。強くある必要もなくなりました。その「鎧」の役目はなくなりましたが、まったく捨てられず、たまに並べて見つめて「あんなこともあったなあ~。私、よく頑張ったじゃん!」と思い出しながら、自分の門出を祝うお酒を飲んでいます。(笑)

M.Aさん



小紋柄のように見えるスカート。

小紋柄とは細かい模様が全体に繰り返し入っている着物の柄ことで、小紋柄の着物は歴史的にもカジュアルな日常着として着用されていたそうです。

日本文化は深く知れば知るほど面白く、柄にも縁起を担ぐものや自然の恵みに感謝するものなど、自然豊かな風土ならではだと感じます。

お気に入りのこのスカートは、和の雰囲気があり小紋柄のように見え、和のテイストを日常に取り入れやすいアイテムです。

学生のころは何事においても海外(外)のものがかったよく見えることが多かったように思います。着物よりもドレスに憧れ、和食よりもイタリアンのお店に行きたかったと思っていました。

フラワーアレンジメントを習っていたころ、「いかに華やかにバランスよく魅せるか」という技を学んでいましたが、講座を重ねるごとに私が知りたいのは「いかにシンプルに美を表現するか」だと気づき、茶室にある茶花(チャバナ)について調べるようになりました。

それをきっかけに日本ならではの文化に興味が湧きさらに深めていきたいと思うようになりました。

ホノルルマラソンに出場する機会がありました。

初マラソンでした。元々体力に自信のない方だったので、走り込みはもちろん、軽くて機能性の高いウェアを用意してホノルル入りしました。

現地で水着を買いました。とても気に入るデザインのものが買えました。街中をパーカー、海パン、ビーチサンで歩く、これがハワイかと。とても解放的な気持ちになると同時に、このまままだ真面目にマラソンに参加していくのだろうかという気持ちになりました。

ハワイらしさを纏い現地を走りたい。そんな思いから当日は水着を履いて走りました。今まで履いてきたウェアと比べて長いし、重いし、伸びないし、擦れるけども、最後まで走りぬきました。

写真を見返すと(とても些細な変化で水着かもわからないですが)あのときおしゃれして走っててよかったです。

自分のなかでファッション性が機能性を上回ったエピソードでした。

K.Jさん



20数年前、学生時代に並木坂の古着屋さんで購入した初めてのPatagoniaのフリースです。県外から熊本に帰省していたタイミングで「イケてる」と思い購入したのですが、嬉しくてお店で着替えてそのまま着て帰ったことを覚えています。

西暦2000年頃、熊本は独自の古着ブームでオーバーサイズが流行っていたと記憶しています。中国地方の大学に行っていたのですが、雰囲気が熊本っぽいと友人からから言われ、周囲の人間とは少し違う雰囲気だったのかもしれません。県外での生活を熊本スタイルで4シーズン過ごしました。社会人になってからは好みが変わりめっきり着なくなり、収納の奥にしまい込んでいました。

衣替え時に久しぶりにみてはつれや痛みはほとんどなく、約20年ぶりに袖を通しました。この服を見ると学生時代の冬の出来事や並木坂の街並みや雑誌「NO.1」を思い出します。家族からは思ったより好評で、若作りかなとも思いながらも着用しています。現在は当時の思い出に想いを馳せながら、家族との思い出をアップデートしています。

H.Tさん





約20年前、カンボジアを旅した際に購入したTシャツです。当時、戦場カメラマンの一人瀬泰造に憧れてシェムリアップを訪れました。内戦の爪痕が残る街では、地雷による被害が深刻で、特に野原で遊ぶ機会の多い子供たちが犠牲になる現状に胸を痛めました。地雷は相手の進軍能力を弱めるため、命を奪うよりも足を吹き飛ばす目的で使用され、その結果、片足を失い松葉杖で歩く子供たちの姿が街中に見られました。

2004年2月26日、私は「アキラの地雷博物館」を訪れました。博物館を設立したアキ・ラーは、かつてクメール・ルージュの兵士であり、その後ベトナム兵としても戦いましたが、終戦後、自ら埋めた地雷で子供たちが犠牲となっている現実に直面しました。そして、地雷撤去活動を始めたと共に博物館を設立し、その収益を子供たちの支援に充てました。このTシャツは、少しでも子供たちの力になればと願いを込めて、その博物館で購入したものです。



この服は、お見合いで妻と初めて会う日のために調達した服です。

服と言えば機能性重視で選び、見栄えや服の価値などには疎い人生を送ってきました。そんな私が、初めて見栄えを意識して購入した服となります。自分で選んだというよりも、店員さんに言われるまま試着をして、鏡を見たときに「なんとなくイケてる」と思い購入しました。

「なんとなくイケてる」と思って着て行った当日は、緊張で何も覚えていませんが、その後もうまく進展しました。義両親への挨拶や結納など結婚までのイベントはすべてこの服を着て行きましたが、緊張のあまり記憶があいまいです。

この服を手に入れるまで、服で感情が動くことはなかったのですが、「LOVE」を伝えるために選んだこの服は、店員さんにコーディネート情報を伝えて選んでもらうちょっとした恥ずかしさ、服を着て実際に会う日の緊張感、うまく進展するか分からぬ不安感など、自分の感情が大きく動かされるものでした。

無事に結婚できた後も、特別な日にはこの服を着用します。一生大切にして、一生着続けたい服です。



初めて、白衣に身を包んだあの日…。
胸に抱いたのは、期待と不安、そして誰かの力になりたいという、真っ直ぐで純粋な気持ちでした。
この爽やかなブルーのワンピースは、わたしの看護学生時代の白衣です。

当時、白衣を着ると自然と気持ちが引き締まり、実習にも熱が入ったものです。
制服に宿る不思議な力。白衣は、単なる予防衣以上の意味を持ち、仕事への誇りや憧れ、使命感…そんな色々なものを内包し、医療に携わる者としての自覚や責任を促す大事な役目を担っていたように思います。

久しぶりにタンスの奥に仕舞い込んでいた白衣を手に取ると、学生時代の懐かしい思い出が次々と蘇ってきます。

時が流れ、やがて50歳を迎えようとしている今、30年前の自分に問いかかれている気がします。「30年前の自分に誇れる今を生きていますか?」「あの時の気持ち、今も大事に生きていますか?」

——原点回帰。
心の道しるべとして、今も捨てられない大切な一着です。



寒い冬。日本の親父、袴纏でしょう。

幼少期から父親が来ている姿を見て育ち、大人になったら袴纏を着たいと憧れています。

大人になって探していましたが、自分の思うようなものを見つけられずに過ごしていた時に、妻の実家で袴纏を欲しがっていましたことを話すと、倉庫からこの袴纏を持ってきてもらいました。妻の祖父のものを保管していたとのことで、古いものようです。私が使い始めて10年たちますが、見てのとおりほつれや痛みは少なく、しっかりしています。

初めは色合いが派手だし、サイズが少し小さいことが気になっていましたが、着ていくうちに気にならなくなり、お気に入りになりました。

他では見たことのないタグに、妻の祖父の使用期間、なぜこの服を残したか。など、この服には謎があるところも、ほかの服にはない特徴だと思います。

新婚旅行でハワイを訪れたときに購入したワンピースです。青字にハイビスカスが描かれ、可愛らしいデザインに一目惚れし、購入しました。現地でも着用し、帰国後も愛用していました。それから25年。すっかり色褪せてしまい、着る機会もなくなりましたが、今でも捨てられず季節の変わり目で衣替えするときに目にに入った瞬間、当時が一瞬にして色鮮やかに蘇ります。

当時は、結婚、新婚旅行、初めての海外、と幸せ絶頂期（笑）。青い空にキラキラ透きとおる海をバックにお気に入りのワンピースを着て砂浜を歩く私は、きっとこれから先も幸せであろう未来を見ていきました。そして現在。お陰様で当時の夫と心豊かに大好きな熊本で暮らしています。

私は、人は一生のうちで惹かれる洋服に巡り合えることはそこまで多くないと思っています。その時の場面や感情、思いなどによってもお気に入りの服は変化するもの。その頃の私はその瞬間感じた思いを今の未来の私へ繋いでくれた。だからこそ、このワンピースを大切にしたいのです。



I.Hさん



今年の夏、1泊2日の大分旅行でのサファリキャンプを計画しました。そこで私はキャンプブランドのColumbiaのTシャツを購入しました。緑と黒、同じデザインの2枚のTシャツです。同じデザインの服を複数枚買うのは珍しいかもしれません、私はどうしてもこの2枚が欲しかったのです。背中のロゴデザインと色味がかっこよくて、緑と黒どちらも捨てがたく片方にするということはできませんでした。

緑のTシャツを着た日は、広大な草原を歩き回る動物たちを見て子ども達と興奮し、星空の下、動物たちの夜の声を聴きながら、家族で焚火を囲んで楽しい時間を過ごしました。

次の日は黒のTシャツを着て、水族館を周り、悠々と泳ぐ魚たちを観察しました。イルカに水を掛けられたことは驚きましたが、暑い夏の日にはとても涼しく子ども達も大はしゃぎでした。

この2枚のTシャツは、ただの服ではなく、家族との特別な出来事をいつでも思い出させてくれる大切なアイテムとなりました。正直言うと2枚同じデザインを買うということに、少し抵抗があったのですが、いつも違うことをすると、より思い出が色濃く残るような気がします。

今は新しいこの服も時間が経つに連れ、思い出という「わ」が刻まれるかもしれません。来年の夏には、この緑と黒のTシャツを着た私がどこで思い出を作っているのかと、楽しく思いを馳せています。



H.Tさん



「神よ、私に与えたまえ。変えられないことを受け入れる心の平靜と、変えられることを変えていく勇気と、それらを区別する賢さを」。
ラインホルド・ニーバー（神学者兼政治学者）の“平安の祈り”
私の好きな言葉です。

今年度で40歳を迎え、人生だけでなく仕事でも折り返し地点だなと思うようになりました。

公私ともに周りに多彩な変化があり、そんな中「変わらなければ…」と思う自分と「このままでいい…」という自我がしばしば交錯します。

このダウンジャケットは10年前に妻に選んでもらったものです、「先輩はいつもこの服だけん！」と同僚に言われるぐらい、私の冬の服装といえばコレ！という代名詞がついています。

実はこのダウンジャケットは二代目です。
ちょっとくたびれて、破れたりもしたので新しいものを買おうということになりました。

新しい色にしようと思いましたが、娘から「パパはやっぱりこの色だよね」という強い推しがあって、同じ色の物を買いました。

よく見みると細部が少し違いますし、袖を通した感じも何となく前と違う。
変わらない部分もありつつ、変わっているものもある。

袖を通すたびに自分に落ち着きと勇気をくれるお気に入り服です。

M.Sさん



私はバスケが好きで、昨年、こどもがバスケを始めたことをきっかけに、自分も少しプレーを再開するようになりました。写真は高校生の時に部活で着ていた練習着です。パンツは高校からバスケットボールを始めた私に先輩がくれたものです。この服はサイズが大きめなので、今ではバスケをする時でも着ることがない服ですが、何となく捨てられないまま、タンスの中にしまわれています。

当時の私は派手な色の服を選ぶことが多くて、学生服のシャツの下にはピンクや水色のTシャツをきていました。部活の服にも好みがでているのか、この真っ赤な練習着を好んで着ていた気がします。

サイズが大きめのこの練習着には当時の流行りがみえます。私が高校生だった2000年代は、バスケ最高峰のリーグであるNBAでアレン・アイバーソンという選手が人気でした。身長183cmという小柄な体格にも関わらず圧倒的な得点力があり、全世界のバスケ少年が憧れる存在でした。そんなアイバーソンが好んだファッションはいわゆるB系ファッションでダボっとしたオーバーサイズでした。漫画スラムダンクが流行った1990年代はバスケのパンツは短パンが当たり前でしたが、アイバーソンの影響から2000年代の高校生はみんなダボっとしたサイズのユニフォームを着るのが当たり前の時代だったのでした。

時は経って現在、久しぶりにバスケに触れると、ルールは改正され、プレースタイルにも変化がありました。2020年代はスリムフィットしたピッチリ目のユニフォームが流行りのようです。時間の流れと変化を感じながら私は練習着を新調しました。新しい服に新鮮な気持ちが芽生えます。当時を懐かしみながら、自分自身をアップデートしていく一歩を踏み出した感覚がありました。



身なりは人を表すとはよく言ったもので、わたしのファッショ
ンのテーマは一貫してオリジナリティ。
だいたいデザイン重視と着心地重視が行ったり来たりして
人生で、なるだけ人とぶつることがないよう、めずらしいセレ
クトのショップや古着屋さん、裁縫好きな友人に頼み込んでイ
チから作ってもらうなど、とにかく自分らしくあることにこだ
わってきました(*!)。

そんな私が行きつけた先は、なななんとオーダーもの。
なにせ熊本にはそれができるお店(*)が(手取神社あたりに)
あって、かゆいところに手が届いてしまうのだから仕方ありません。スカート、ジャケット、トップス、シャツとさまざま作っ
てきた中で、お気に入りの一枚をセレクトしてみました。

この服は既存のパターンを元に、自ら生地を選び、丈を伸ば
したセミオーダー。デザインはもちろんのことながら、とくに
気に入っているのがこの生地です。

(上質なスイスコットンが使われ、スクエアのジャガード織
の上に千鳥格子が重ねてあるという贅沢なつくり!)

友人の結婚式から、仕事の大切な場面まで、背筋を伸ばし、
キリッとカッコ良い私を演出してくれるほんとうに心強い相棒
です。

*1 アシメブーム期（自分基準）には、服はもちろんヘアスタイルもアシメ。
たしか右はショート、左は肩くらいで長い方の髪にはウェーブがかっていた時代も。
*2 熊本出身のデザイナーが手掛けるブランドの路面店。
コレクションの取扱とともに、デザインされた服の型紙を利用してセミオーダー（フルも可）
ができる店もある。
生地もコレクションで使われたオリジナルプリントのものから海外のものまで幅広い。



きれいな刺繡が入ったスカートです。
10年以上前に購入しました。知り合いの古着屋さんで
一目ぼれしたものでした。

でも、当時から今まで一度も着ることがありませんでした。
どうしてか。

当初は、背伸びして購入した気持ちもあって、普
段着では履けないかもという意識がありました。そのうち、
結婚し出産するなかでライフスタイルやスタイル（体型）
の変化もあり、クローゼットの奥にしまい込んで、履く機
会を逃してしまいました。

でも、たまに眺めては、「やっぱり刺繡がきれいだな～」
となかなか処分できませんでした。

1年着なかった服は処分しないとの教えもありますが、
捨てられず十数年…。

こどもが少し成長したので、これからはなるべく自分の
好きな服を着てみたいという気持ちが湧き上がってきた
ので、このスカートに再度チャレンジしたいと思います。
また、新しい自分が見つかるかもとワクワクする気持ちです。

私は、「服」は数年でくたびれてしまうと、古いもの
は処分し新しいものと入れ替えてしまうので、現存する
自分らしいファッション＝小物でした。

前置きが長くなりましたが、ここでクイズです。こ
の写真のアイテムの共通点は何でしょうか？

※ピアスはビーズのパーティでなく、薄ベージュの
キャッチ部分に注目ください。

正解は、職人が手作業で作っていること、自然素材
だからこその一点モノということです。

指輪二つとピアスのキャッチは、眼鏡のまちとして
知られる福井県鯖江市の会社のもので、眼鏡の素材の“
セルロースアセテート”という天然由来素材を使って
います。とても軽くて肌なじみがいいです。

腕時計は、ベルトの部分が木でできています。カナ
ダの会社のもので、「カナダに生育するメープルウッド
のよさをなんとか世界中の人々に届けることができな
いだろう」との創業者の思いから生まれたそうです。
これも、とても軽くて肌なじみがいいです。

こういう「手作業で生まれた感」や「1点モノ」は、
服だとなかなか難しいです。日頃は意識していません
でしたが、こういったアイテムが好きなようです。こ
れからも少しずつ増やしていくたいと思っています。

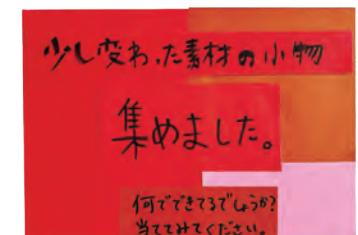
これは私が大学4年生の頃、所属していたダンス
サークルでの最後の文化祭で最終学年のメンバーと
フィナーレを飾るときの衣装として作ったTシャツ
です。私がデザインを担当しました。

基本的に持ち物は最小限でいたい私は、大学時代
に着たたくさんの中でも「もう着る機会もないの
…」「写真に残っているのでもういいか…」と少しず
つ手放してきましたが、このTシャツだけは写真に
も残っているのにずっと手放せずにいます。

今回、改めて引っ張り出してみて「サークルに格
好良く煙草を吸う女の子がいて、デザインの参考に
したな」「手書きでデザインしたものの、パソコンで
やればもう少し綺麗にできたかな」「当時は入院試験
の勉強をしながら文化祭に向けた振付を考え、Tシャ
ツの作成もして忙しかったな、頑張ったな」とは
いえ、もう少し凝ったデザインにできなかったのか、
私！」などいろいろな思いを巡らせました。

クローゼットにしまっていたこのTシャツがまた
日の目を見る事になるとは思っていませんでした。

これからも思い出に浸れそうなので、心躍るこの1
枚、やっぱりまだまだ手放せそうにありません。



髪の毛をハーフアップにしていた頃に揃えたヘアアクセサリーです。このヘアアクセサリーは、ゴムで髪をくくった後、そのゴムにはめ込むようにしています。最近は付ける機会も減りましたが、引き出しなしにまとめておくのはもったいないので、出窓にこのように置き、木枠のなかには（今回は造花ですが）多肉植物を入れて飾っています。ピンク色やクリスタルなもの、形も様々でどれもお気に入りです。

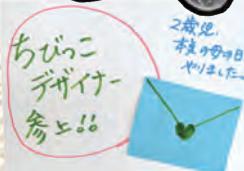
ヘアアクセサリーを付けるときは、「今日はこの気分！」「洋服の色に合わせてみよう」など、朝から選ぶ時間は心躍ります。そして、出窓に飾っていると、光のあたり具合でキラキラ反射したり色が混ざり合って輝いたり、まるでプリズムのように光が屈折して様々な色を見せてくれます。

綺麗なので普段から見えるところに飾りたい。しかも光の角度によって色を変えキラキラ輝く出窓に置くことでアートに見えてしまう・・・そんな私の大切なアクセサリーです。

T.Tさん



T.Kさん



普段あまりアクセサリーを付けない私がとても大事にしているイヤリングです。デザイナーは、私の息子。

このイヤリングは息子が保育園で作ってくれた、初めての母の日のプレゼントなのです。

プラバン（オーブンで焼くと縮んで硬い板になるプラスチック製の薄い板）に息子が絵を描いて作った世界に1つしかないイヤリング。自由に伸び伸び描いた柄や柔らかい色合いに個性を感じます。

…とはいって、作製当時 彼はまだ2歳児。

好きなように絵を描くだけ描いて、残りの加工はぜんぶ保育園の先生がしてくださいました。

息子の描いた絵を見て、いつの間にかこんなに上手にお絵描きができるようになったのかと成長を感じるとともに、母の日に向けて「お母さん達が普段使えるものを」「お母さん達が笑顔になるものを」「今の子ども達でも製作に関わるもの」と試行錯誤しイヤリングを作ることに決めた保育園の先生方の苦労や温かさを感じられる作品です。

息子は日々成長していく、今ではこれ以上に上手な絵を描けるようになっています。

製作当時の彼にしか描けなかったこの作品。私はこれからもずっと大事にしていくのだと思います。

受講者の感想

・服を選ぶ際は行き先や会う相手を考えて服を選ぶことが多く、周りにどう映るかといった視点がファッションで重要と考えていた。今回のワークショップで1着の服に対し様々な事を考える中で、他者のためではなく自分の気持ちやアイデンティティを表現するために服を選んでいたのでは、と感じた。

・服やアクセサリーに込められた思い出から皆さんの人となりがより分かり、藝大の先生方が仰っていた「作品で人を見る」のように、今回の服・アクセサリーやエピソードで皆さんの顔が浮かぶようになった。

・自分が作品を作る過程はもちろん、他の研修生の話や作品を見たときに、服を選ぶというたった一つの行為にその人の価値観や自分らしさが存在することを感じられた。日常の何気ない言動をどのように観察し、自分なりに捉えていくのか、価値観の広がりを感じることができたことが良かったと思った。

・今回のワークショップは最も自分との対話を必要とした気がする。自己の人生を振り返る機会になった。日々の業務においては、目の前の業務をこなすことに精一杯になりがちで、自分を振り返る時間は少ししかない。プライベートになると、さらにその時間はなかったため、恥恥ずかしさもあったが、良い時間だった。

また、私はエピソードを考えるときに自然とファストファッションは除外していた。しかし、UNIQLOのダウンジャケットを展示しているものを見て「ああ、ファストファッションだろうが一点ものだろうが、その人を形作るものには変わりないのか」と思った。もちろん、一点ものにはその良さが格別にあるだろうが、個人の持つ思いとは別物ということに気が付いた。

・対象から受け取る印象だけでなく、その対象にまつわるエピソードを知ることで、見え方や感じ方が変化することにアートの力があると感じた。事物や事象にはそれぞれの背景に個別のエピソードがあり、それに目を向することで、より本質的な理解に近づけると思った。

アートでの問診 — 田中一平 (東京藝術大学 特任講師)

DOORプロジェクトの熊本市職員向け研修プログラムは2023年より実現に至り、実践あるのみという気持ちで2年目を終えようとしていますが、その成果はとても大きく感じています。今回取り上げたファッション展は、4回あるワークショップの中の3回目のもので、現代美術館の企画展と関連した内容にしたいという日比野さん発案のもと「ファッション」（現代美術館では「LOVE ファッション—私を着がえるとき」を開催中）がテーマとなりました。制作の内容は、想い出のある服や小物など、自分が身につけていたものをエピソードと共に持参し、店舗のようにポップを制作し、展示をする、という内容でした。その内容を聞いた時、研修生がパーソナルなエピソードを持ち寄り発表することに対応できるか？という一抹の不安がありました。ですが、実際は個人的なエピソードを服と共に発表し、展示もしてくれました。



個人的な体験を他者に向けて出すことは、個人の表現活動のステップとしても、研修としても重要でありました。市役所職員と一概に言っても、職種は多岐に渡り、今回の受講者の20名だけでも多種多様な専門性を有しています。それを表すように、出てくるエピソードも多様ありました。また、それを聞いている側も自分と重なる共通点を見出し、共感をし合い鑑賞し合うという状況も垣間見られました。共感し合う、というのはアートの持つ効果の一つであり、日常の立場を超えて個人と個人のつながりを持たせる、時には信頼にもなり得る重要な要素であります。

受講生が服にまつわるエピソードを語りはじめ皆が耳を傾ける様子は、医療分野でいうところの問診のようでもあり、文化的な処理(※1)を考えていく上でとても重要なシーンだと感じます。アートは、過去を振り返る機会を与え、変化をもたらすことができる

きます。研修での各人のエピソードトークはその人自身の過去を語らせることであり、その人の深みを知ることができます。どのような仕事でも相手のことをよりよく知ることが、適切な（広い意味での）サービスへと繋がることを思うと、アートの役割は随所にあり、研修のアウトカムとして、日々の業務の中での効果も期待されます。

今回の展示では、ゲスト講師として、アパレルショップcougの鳥田さんにもご参加いただき、日比野さんとともに講評に加わっていただきました。ファッションの観点からのコメントを各出品者にいただき、美術だけでは見つけられない視点を多くいただきました。そのコメントからは、熊本のファッション文化も盛んで独自性があることが知れました。展覧会の準備にあたっては、熊本市現代美術館、また、什器などを商店街の洋装のタバタ、熊本市立必由館高校より協力をいただき、街と共に美術館が共存している様子も興味深い点です。

アートによる効果は目に見えないことが多いにも関わらず、その目に見えないものを捉えようとし、よりよいまちづくりに転化しようとしている方々と出会うと、この研修の根底の部分を既に理解をしていただいていると感じます。熊本の土地の独自性を活かし、今後のさらなる発展を共に考えていくようとに願います。

(※1) 文化的な処理とは？

東京藝術大学ART共創拠点が2023年よりスタートした取り組みです。個々人が抱える諸課題や社会との関係性、地域の文化芸術資源や場所の特性などを踏まえ、アート活動と医療・福祉・テクノロジーを組み合わせ、その人がその人らしくいられるレジリエントな場所やクリエイティビティな体験を創り出します。それにあって、楽しさと感動を生み出し、心が解放され、人と人の緩やかなつながりや心地良いコミュニケーションを自然と発生させる。個人の対象には、活動する意欲や幸福感の増進および健康状態の回復・予防に係る継続的な効果を、面的な対象には、寛容性や包摶性の向上に係る効果を与えるとする手法・方法・システムと定義しています。





熊本市研修プログラム DOOR 思い出ファッション展

会期：2024年12月21日（土）～2025年1月13日（月・祝）

ワークショップ：2024年12月20日（金）

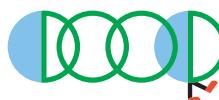
時間：10:00-20:00

休館日：火曜日、年末年始（12月30日～1月3日）

会場：熊本市現代美術館井手宣通記念ギャラリー

観覧料：無料

協力：洋装のタバラ、coug、熊本市立必由館高等学校



Diversity on the Arts Project

Diversity on the Arts Project（通称：DOOR）は「ケア×アート」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成する東京藝術大学のプロジェクトです。

熊本市職員向け研修プログラム Diversity on the Arts Project
プログラム実践演習記録集 想い出ファッション—個としての公務員—

発行 | 熊本市文化政策課

企画・運営協力 | 東京藝術大学／熊本市現代美術館（公益財団法人熊本市美術文化振興財団）

編集 | 熊本市文化政策課／日比野克彦・田中一平・藤原旅人・山口萌（東京藝術大学）／岩崎千夏（熊本市現代美術館）

デザイン | 藤田瞳（acre）

2025年3月発行

@KUMAMOTO CITY 2025 Printed in Japan

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1番1号

TEL 096-328-2039 FAX 096-324-4002

MAIL bunkaseisaku@city.kumamoto.lg.jp <https://www.city.kumamoto.jp/>



×



TOKYO
GEIDAI

×

CAMK
Contemporary Art Museum, Kumamoto